

第 1719 回（6 月 10 日）

## 世界の食糧問題の展望

中 川 光 弘

世界の食糧問題は、世界全体として見た場合には、明らかに改善の方向に向かっている。これは端的には、途上国の飢餓人口割合が 1970 年代初頭の 35% から 90 年代初頭の 20% に低下したことや、途上国平均の 1 人 1 日当たりの食糧摂取量が 70 年代初頭の 2,150 kcal から 90 年代初頭の 2,550 kcal に増加したことに現れている。

しかし、食糧問題の改善には、地域的な偏りが見られ、特にサブサハラアフリカや南アジアではその改善が遅れている。サブサハラアフリカでは、年率 3% を超える高い人口増加や域内穀物生産の伸び悩み、政情不安、外貨不足等のため、食糧問題の改善が大幅に遅れており、人口全体に占める飢餓人口の割合は 70 年代初頭の 38% から 90 年代初頭の 43% へ上昇した。南アジアでは、90 年代初頭でも 5 歳未満児の 6 割が栄養不良児と推定されており、栄養不良は、高い乳幼児死亡率の主因となっている。

同じ国内でも、食糧問題は農村と都市の貧困層、乳幼児、児童、女性に集中化する傾向が見られ、食糧問題の解決のためには、農業生産の拡大、食料流通機構の整備、栄養教育の普及とともに、経済発展と所得分配の是正が必要である。

世界の穀物需給は、80 年代の穀物貿易の伸び悩みを主因に過剰傾向が強かったが、その後過剰調整が進んで 90 年代半ば以降逼迫傾向が強まっている。その背景には、特に経済成長の著しいアジアでの穀物需要の増加があり、アジアでは畜産物消費の増加に伴って年率 6% 以上のテンポで飼料用穀物需要が急増している。このため、日本、韓国、台湾、マレーシアでは、穀物自給率が 30% 以下に低下し、ますます世界穀物市場への依存を強めて

いる。

しかし、世界穀物市場では需給基調が逼迫基調に変化する中で期末在庫が減少しており、特にこれまで世界の穀物需給の安定化に大きく貢献してきたアメリカの期末在庫が急減している。アメリカは、これまで主要生産国の不作等で国際需給が逼迫化した場合には自国の政府在庫を放出して国際価格の高騰を抑えてきたし、アフリカ、インド等で飢餓問題が発生した場合には、政府在庫の穀物を緊急援助して、飢餓問題の深刻化を回避してきた。

この意味でアメリカの政府在庫はこれまで世界の緩衝在庫としての役割を果たしてきたわけであるが、80 年代半ばには世界の期末在庫の 45% を占めていたアメリカのシェアも最近では 15% に低下している。1996 年農業法では、財政削減圧の下で政府在庫の水準が低く維持されることが見込まれており、これまでのようにアメリカに世界の緩衝在庫の役割を期待することは難しい。

さらに、地球温暖化等の影響もあって、中緯度地帯に位置するアメリカ、オーストラリア等の穀倉地帯では、80 年代以降、穀物単収の変動性が高まっており、穀物在庫水準の低下とともに世界の穀物市場を不安定にするもう一つの要因となっている。アジアとアフリカでは、これからも世界穀物市場への依存をますます強めることが予測されるが、穀物市場の変動性が高まることを考慮すると、食糧安全保障の観点から、食糧供給のあり方を見直すことが必要になってきているといえよう。